



外国人とともに生きる大田・市民ネットワーク 会報

つうしん  
通信

No.124  
2021-9.1

特集：大田区中国帰国者センター

大田区中国帰国者センターのこれまでとこれから

大田区中国帰国者センター長 鈴木洋子

2009年2月、大田区中国帰国者センターは大田区からOCNetへの委託事業として設立された。初代のセンター長は2016年4月に急逝した夫・鈴木昭彦だった。さかのぼる事30年程前、昭彦は過酷な労働環境の中で働く外国人の状況を鑑みて、日本語学習支援、相談事業、各種イベント支援を行うため数人の仲間達と、「外国人とともに生きる大田・市民ネットワーク(OCNet)」を大田区に設立した。OCNetの相談事業の支柱は「伴走型支援」である。問題解決に向けての様々な場面の中で、相談者と一緒に考えながら取り組む「寄り添う支援」である。彼はよく「人に相談するということは本人にとってハードルが高いはず。来てくれただけで十分」「解決のために何も出来なかったとしても、十分に話を聴くことは出来るでしょ」と言っていた。

#### 1・帰国者センターのこれまで

帰国者センターが最初に取り組んだのは、中国残留邦人(中国残留孤児、残留婦人の総称)の実態調査であった。日本に永住帰国したものの、言葉や文化の壁に阻まれて苦労している帰国者の現状を直接会って聞き、要望を受け止める為であった。センターが大切にしてきた理念は、「当事者の意見の尊重」で、具体的な方針としては、①各種会議に帰国者も参加し帰国者の意見をセン

ターの活動に反映する、②センター便りを発行し地域社会に中国残留邦人への理解を広げ、帰国者が地域で安心して暮らせるよう様に取り組む、③地域の方に各種イベントに参加していただき、帰国者との交流を深めていく事等である。

その後、年々高齢化していく帰国者への対応として、介護予防委員会を設け、帰国者の要望であった、母語で話しながら麻雀、カラオケ、トランプを楽しめる場所として、「交流サロン」を設置した。また、高齢福祉課の助成金を得て、帰国者の自主組織「桜会」の創設を支援し地域の高齢者と交流が出来る様に着々と準備を進めていった。センターの基礎作りがほぼ完成した2016年4月、昭彦は急逝した。東京新聞の記事で、「親戚のおじさんの様な親しさがあった。」と帰国者の声が紹介された。また「喪失鬱」になる帰国者も見られた。

その後、帰国者の高齢化はますます進み、「戦中・戦後の辛かった時を忘れそうになる」との意見に触発され、2年を費やして、2020年に創立10周年記念誌『私達の歩み』を発行する事が出来た。識字のない帰国者には、インタビュー形式で当時の辛かった生活や、文化大革命時代や養父母の事を語ってもらい文章にまとめた。帰国者の体験や思いが文章化された冊子として、貴重なものとなったと自負している。次世代に戦争の記

憶が語り継がれる様に、区内図書館、小学校、区議会議員にも配布した。

## 2・帰国者センターのこれから

2020年2月に始まった新型コロナウイルス感染症拡大に伴って、センターも運営方法の変更を余儀なくされている。各種イベントはリモートでの開催となり、帰国者が楽しみにしている交流サロンは自宅に「手芸材料キット」を送付して楽しんで頂き、その完成品を撮影した写真をチャットでセンターに返送してもらい、「センター便り」に掲載して作品紹介をしている。日本語学習もリモート授業や通信教育方式を取り入れている。

そんな折り、2021年3月早春、一人暮らしの帰国者が自宅で自死しているのが発見された。

翌4月から「一人暮らし支援プロジェクト」を立ち上げ、週1回電話による安否確認を実施している。話の中で深刻な相談が隠れている事が分かり、2021年後期から、帰国者訪問事業を開始する事になった。2022年度は予算計上する為、現在、区と交渉中である。私の不十分さを区から指摘される度に「昭彦だったら」と考え込む事が度々ある。

しかし、困難な問題が生じる度に、「一緒に頑張ろう」と声をかけ合う日本人スタッフと中国人スタッフの存在が私の背中を、センターの活動を力強く支えてくれている。今後も帰国者の声やスタッフたちの新しい視点の意見に耳を傾けながら、状況に応じた帰国者への支援を行い、この困難を乗り越えていきたい。

### 中国残留邦人とは・・・

満州が「日本の生命線」と重要視された理由の一つに、広大な土地と資源が有りソ連からの侵入を防ぐ防衛基地の要となっていたことが考えられる。日本は日清戦争、日露戦争に勝利したが、国内は世界恐慌の煽りで長い不況が続いていた。特に東北地方の農村は深刻で、口減らしとして娘を売って凌いでいる状態に陥っていた。不況から抜ける対策の一つとして国は満州への移民政策を決定した。そこで「満州に行けば田畑が持てる」という「幻想」を持たされ、全国各地から約27万人が満州に渡ったのが満蒙開拓団である。

長期化する大戦下、1944年になると戦局は悪化し、開拓団の男性も戦場に根こそぎ動員された。その為、開拓団には女性、老人、子ども達だけが残された。

1945年8月9日、不可侵条約を破棄したソ連軍が全満州に侵攻してきたため、着の身着のままの逃避行となった。その中には開拓団長の命令で「子供の泣き声で見つかる」からと母が子供を殺したり、分村全体が集団自決する等、悲惨な状況が長く続いていった。戦争が終結した後も難民収容所では餓死や病死の子供達が後を絶たなかった。生き抜く為に現地の中国人と一緒に生活したり、小さな子供の命を救う為に中国人に子どもを渡す人が続いた。中国残留邦人はこの状況の下で生まれた。終戦時13歳以上の方を残留婦人等、13歳未満の方を残留孤児と国は定義している。

戦後、政府が取った対応は、中国人と結婚した13歳以上の女性に対し、「自分の意志で残った」と位置付け、戦後5年の内に帰国しなかった人々に対しては死亡宣告制度に従って日本国籍を剥奪する等であった。中国残留邦人の永住帰国が大変遅れたのは、政府の採った棄民政策の姿勢が大きく影響していると思われる。残留邦人の帰国がやっと実現した時、残留孤児は50代半ば、残留婦人は60代半ばになっていた。帰国後所沢にある中国帰国者定着促進センターに入所し、四カ月間日本語学習、日本の習慣等を学んだ後、希望する地域の公営住宅に入居して、自立した生活を目指していった。しかし日本語が十分にできない為安定した仕事に就けず、自分らしく生きられない、尊厳を大切にしたい生活が送れないとの判断から、全国の帰国者は国を相手に国家賠償請求の裁判を行い、7年半の裁判闘争の結果、「改正・中国残留邦人支援法」を獲得する事が出来た。これによって年金支給額を加算した生活支援や地域での日本語教室、医療通訳派遣事業等が実施されるようになった。2009年、大田区には大田区中国帰国者センターが開所した。

## 2020年度大田区中国帰国者センター事業一覧

項目	実施日	場所	内容	回数
中国帰国者センターの集い	11月21日	アプリコ小ホール	地域の理解を求め、残留孤児の証言を聞き交流する	1回
栄養相談会	3月17日	糀谷文化センター	栄養士に食事内容の相談	1回
介護予防事業 交流サロン	通年	mics 教室他	社交ダンスと民族舞踊	10回
手芸	通年	制作キットを郵送	手芸品制作を楽しむ	4回
散歩	10月21日	田園調布、宝来公園	健康増進と地域見学	1回
お楽しみ会	9月16日	糀谷文化センター	健康増進と交流をはかる	1回
料理講習会	3月17日	糀谷文化センター	栄養バランスよい料理を学ぶ	1回
健康教室 太極拳	通年	mics 教室	健康と交流	10回
課外事業 バスハイク	11月11日	生田緑地	日本語教室の課外事業	1回
日本語教室	通年	消費者生活センター・mics 教室・オンライン	帰国者のための日本語教室	38回
パソコン教室	通年	帰国者センター	PC やスマホ使用を学ぶ	9回
医療健康相談 医療相談会	3月24日	mics 教室	医師に健康管理を相談	1回
歯科講習会	3月25日	帰国者センター	歯科医師から口腔衛生を学ぶ	1回
センターだより発行	6、9、1月		センターの活動を広報	3回
自立支援通訳派遣等	通年	帰国者センター、病院等	中国語通訳派遣	473回
自立指導員総合相談事業	通年	帰国者センター、各所	相談および訪問	315件

### 【各事業の内容を抜粋してご紹介します】

#### 料理講習会・栄養相談会

管理栄養士を招いて開催しました。

#### 《料理講習会》

【メニュー】 鮭ホイル焼き  
ほうれん草のナムル  
卵焼き

感染防止のために今回は会場での飲食はせず、料理を作って各自が容器に入れて持ち帰りました。わかりやすい指導で、おいしい料理が完成しました。

-参加者の声-「料理講習は久しぶりだったので、楽しかった。」「鮭は中華料理ではあまり使わない食材ですが、おいしかった。出汁入り卵焼きの作り方もわかりました。」「またこういう機会を作ってほしいと思いました。」

#### 《栄養相談会》

引き続き管理栄養士による栄養相談がおこなわれました。糖尿病、高血圧症などを有する人のための栄養上の注意点や料理を作る際の調味料の量や種類について、個別にいていねいな相談を受けることができました。

-参加者の声-「家での食事の注意点がよくわかりました。」「塩分を減らす努力が必要だと思いました。」





## 大田区中国帰国者センターの集い

コロナ感染予防のため、参加者同士がなるべく接触しなくて済むように「映画と証言の集い」を開催しました。映画は厚生労働省編纂の満蒙開拓団帰国者の証言記録を見ました。

後半は区内の中華料理店ニイハオの社長 八木功氏の講演を聞きました。

貴重な写真とともに八木氏の旅順時代の戦争体験、戦後の帰国のいきさつや帰国後の苦闘が語られました。

大田区長や区の担当者、八木氏の支援者も来られ、満蒙開拓の歴史や帰国者センターの活動を改めて知っていただくことができました。

今までセンターに関わりのなかった一般の方たち参加され、全員が八木氏の人生の歩みに深い感銘を受けました。



講演の後、帰国者による楽器演奏や踊りが披露されました。日頃の練習の成果を披露する機会になりました

-参加者の声-「涙がでました。」「八木氏の運命に負けない努力に満ちた人生の軌跡を知って感

銘を受けました。」「証言ビデオの内容は悲惨で、戦争は子どもや女性も大きな犠牲を払うことがわかりました。」「八木氏のすばらしい人柄が周囲の人の支援を呼び込んだのだと思いました。」



## 《ダンス》

毎月1～2回、集会室や体育室で講師とダンスを楽しんでいます。民族舞踊や社交ダンスも習います。小道具も使い、衣装を手作りしたり、楽しみながら健康増進や帰国者同士の交流もはかっています。



音楽に合わせて身体を動かすことで、気持ちも活性化することができます。毎回10名程度が参加します。

-参加者の声-

「身体を使って表現するのが気持ちがいいです。」  
「ダンスを通じて仲間ができるのがうれしいです。」

「時々、発表の機会があるので励みになります。」



## 《散歩》

電車で田園調布駅に移動し、住宅街を散策したり、公園をめぐりました。人混みがまったくなく、安全な外出になりました。宝来公園では水鳥の観察もできました。



-参加者の声-

「静かな街を散策して公園では秋を感じました。」  
「遠くまで出かけなくても、近くにもいい場所があることがわかりました。」





## 健康教室 太極拳

講師とともに太極拳で身体を動かしています。中国にいる時から経験している人もいて上手にできています。

ゆったりとした動きなので、高齢者にも無理なくできる運動です。帰国者だけでなく、地域の人たちも参加しているので、交流に役立っています。なごやかな雰囲気ですが、意外と運動量があり汗をかきます。膝や腰に負担がかかりにくく、長年続けている人が多いのが特徴です。密にならず、

互いに接触することもないので、コロナ禍でも安全におこなえます。



## 日本語教室

毎週金曜日の午後、レベル別に4クラスに分かれて学習しています。各クラス2名から10数名の少人数でしっかりと学びます。2020年度はコロナ感染予防のため、対面授業だけでなく、オンライン、電話、郵便などを活用しました。実用的な会話練習から新聞の文章読解、作文など、多彩な内容を学習します。

学習効果も高く、会話だけでなく手紙も書けるようになりました。何年も継続している人が多く、楽しみながら学習をしています。

-参加者の声- 「実用的な内容なので日常生活に役立ちます。」 「日本語は簡単ではないですが、少しずつ進歩しています。」

## 医療相談会

医師を講師に招いて健康法や免疫力向上、骨粗しょう症などについて学びました。東洋医学の視点からの解説もあり、活発な質疑応答がなされました。

-参加者の声-

「気さくな医師で質問がしやすかったです。」「東洋医学の説明がよかったです。」「ハリ治療が体験できたのがよかった。」「骨粗しょう症が心配

だったので、今日は不安を解消するいい機会になりました。」



## 映画観賞会

家に引きこもりがちな帰国者に、少しでも楽しい時間を持ってもらおうと、映画鑑賞会を開催しました。スタッフを含め22人が参加しました。映画は「帰来」。文革で引き裂かれた夫婦が、再び心を通わせて家族を再生しようとする家庭ドラマです。コロナ感染防止のため密にならないように注意し、入り口で検温・消毒を実施しました。映画会は初めての試みでしたが、参加者の会話も最少限にし、安全第一に楽しむことができました。



## 相談事業

帰国者センターでは年間約360件前後の相談を受けている。2020年度受けた相談から紹介します。

### A・進路相談

残留婦人4世の青年B君は、曾祖母の介護疲労で倒れた祖母を助ける為、母と共に幼い頃中国から来日した。母子家庭という環境や言葉の壁があって、母は日本に馴染むのに苦労した為、中国を往復する事が多くなった。B君もその影響を受けて二国間を往来している内に、長い間どこにも居場所を作る事が出来ずに苦しんだ。絵を描くのが好きなB君は都立六郷工科高校に進学して、自分を認めてくれる先生に出会った。高校3年生の時、「ホワイトボード絵画甲子園大会」で最優秀賞をとり、絵画専門学校の進学を先生に勧められた。母から息子B君の希望をかなえるにはどうしたらいいかとセンターに相談があった。福祉事務所の母子相談員からは「生保家庭が授業料の高い所に進学するのは認められない」と言われる中で、社会福祉協議会では奨学金の貸与ができる方法を模索してくれた。奨学金が貸与されるまでの一時金は、祖母を初め叔母、叔父等親戚に助けてもらった。そして希望した専門学校の授業料免除申請も認められ、新年度よりB君は朝4時から8時迄アルバイトをしながら、通学して頑張っている。

### B・国民健康保険料支払い相談

Hさんは国民健康保険料の納付書を持って不安気な顔で相談に来た。最初「お金がないので払えない」の一点張りだったが、収入申告をしていないことが原因だと分かると落ち着いて話す様になった。Hさんの話からご主人が会社を辞めて昨年度は無収入だったことも分かってきた。国民健康保険料担当係、課税担当係に問い合わせたところ、無収入であることを申告をすれば保険料が安くなる事がわかり、その後の手続きは自分ですると言って帰っていった。

### C・家族間の軋轢

10年前、残留婦人Mさんの母や兄弟の反対を押し切ってRさんはKさんと結婚した。毎年開かれる残留婦人Mさんの誕生会には、兄弟7人全員が配偶者や孫たちと集まって祝っていたが、Rさん夫妻が呼ばれる事はなかった。妻のKさんはその事を苦にして兄弟やMさんに様々な心使いをしてきたが長年受け入れられず、精神的に追い詰められ外出が出来ない状態が続いた。母Mさんに認知症状がみられる様になり、介護について兄弟間の争いが大きくなっていった時、センターに相談があった。母親、兄弟7人と配偶者等9人がセンターに来所して4時間余り話し合ったが、折り合う事はなく複雑な家族間の感情は空回りした。現在もKさんは不眠や食欲不振、不安症状が続き、センターに相談に来ているが、変化の兆しは見えてこない。相談に来た度に話を十分に聞くようにしているが解決には程遠い感じがする。7年余り相談を受けているが、対症療法で終始している。私達は燃え盛る感情を受け止める事は出来ても解決には繋がらないので、無力感が残る。そんな時、故鈴木昭彦のログセであった、「解決はできなくても話を聞く事はできるでしょ」の言葉を何時も反芻している。

## 今後の活動予定

### ■支援者向けスタッフ研修 ～～残留婦人3世の語り部の話を聞く～～

自分たちの活動を振り返るきっかけとして、このスタッフ研修を企画しました。

大田区中国帰国者センターのスタッフだけでなく、外国人支援に関わっている方に広く参加していただきたいと思っています。来場の他、Zoomでの参加も可能です。完全予約制です。

是非ご参加ください。

主催：OCNet（大田区中国帰国者センター）

協力：首都圏中国帰国者支援交流センター 馬場尚子さん

語り部（中国残留婦人3世）山崎哲さん

日時：9月24日（金） 9：30～11：30

場所：大田区民ホールアプリコ 小ホール

内容：一部 映像を見ながら、語り部山崎さんから祖母（残留婦人）の歩んできた生涯の話を聞く

二部 山崎さんが語り部になったいきさつ～心の変遷～を聞く

申込方法：下記事項をEメールかFAXで9月20日までにお知らせください。

- ① お名前
- ② 連絡先電話番号
- ③ 所属団体名
- ④ 来場かZoomかの別
- ⑤ Zoom参加の場合はメールアドレス（招待メールをお送りします）

申込／問合せ先：Eメール：[jimukyoku@ocnet.jp](mailto:jimukyoku@ocnet.jp)

FAX：03-6424-9103（大田区中国帰国者センター）

#### 《山崎さんの紹介》

山崎さんは、残留婦人の孫で、日本生まれ、日本育ちです。現在一橋大学大学院で社会学（特に満蒙開拓の時代背景）を研究している学生さんです。首都圏中国帰国者センターが主催する語り部研修に参加し、学業の傍らいろんなところで語り部として活動されています。

山崎さんのお話を聞いた難民支援の活動をしている方が、「自分たちの支援の在り方を再考するきっかけになった」との感想を述べています。

### ■東京南部多言語高校進学ガイダンス

主催：OCNet、レガートおおた、IWC 国際市民の会、

多文化共生教育研究会 都立六郷工科高校

日時：10月10日（日） 13：00～16：30

場所：都立六郷工科高等学校

実施方法：対面、完全予約制

申込先：Eメール [jimukyoku@ocnet.jp](mailto:jimukyoku@ocnet.jp)、FAX 03-3730-0556（OCNet）

問合せ先：03-3731-3831（レガートおおた）

発行／一般社団法人OCNet

URL：<http://www.ocnet.jp>

住所：〒144-0051 東京都大田区西蒲田 6-36-14 TTK マンション 1F

Address：1F, 6-36-14 Nishikamata, Ota-ku, Tokyo, 144-0051

FAX：03-3730-0556 E-mail：[jimukyoku@ocnet.jp](mailto:jimukyoku@ocnet.jp)